

「この日は、あなたがたにとって記念となる・・・」

出エジプト 12:14

今までの出来事を、まとめてみましょう。

「わたしの民をを去らせて、彼らを主に仕えさせよ。」という、主のみことばに対して、エジプトの王ファラオは心を頑なにしておお反対しました。しかし、主は次々と力あるみ業を示して、主に逆らうファラオとエジプトに、十の災害を加えられました。ファラオは、なんとエジプト中の初子が打たれるという異常な災害に直面したのです。そして、ついに今まで神様に逆らい続けてきた彼も、イスラエルがすべての物を持って国を出て、主に仕えることを認めました。主のみことばの通りになりました。そして、イスラエル人はエジプトを出る時、エジプトからはぎとるようにして多くの贈り物をいただきました。これも主のお言葉通りでした。主はそのお言葉通り、イスラエルがエジプトに移り住んでから、なんと 430 年目に 彼らをエジプトから連れ出されたのです。

——— 過ぎ越しの祭りの定めの意味 ———

1～20 節は、主がモーセとアロンに命じられた過ぎ越しの祭りの定めです。主はイスラエルがエジプトを脱出する前に、脱出後の生き方を教えられました。この事により、出エジプトの出来事は、単なるエジプトからの脱出ではなく、イスラエル民族の出発、旅立ちとなりました。

——— 具体的な脱出後のイスラエルの生活 ———

ここで、主が指示された神の民イスラエルのこれからの生活の形とは・・・。

(12:1、2 節)

① 出エジプトの出来事が起こった月を、その年の始まりとしました。

つまり、エジプトより救われて、そこからイスラエルの国の歴史が始まったのです。

私たちの人生も、キリストによって救われてから、本当の人生が始まります。

(12:3～14 節)

② 家族単位で一頭の傷のない子羊をとり、ほふり、血を家の門口につけ、肉を焼き、旅支度で食べると書かれています。この経験によって家族全員が子羊の身代わりの死によって救われ生かされているという自覚に立つのです。

(12:15～20)

③ 7 日間種を入れないパンを食べることでした。

これによって古い過去の生活とのはっきりした決別を確認するのです。

さて、いよいよエジプトでの最後の時がやって来ました。それは、エジプト人にとっては恐れ悲しみの時、イスラエル人にとっては救いの時となりました。

——— 新しい出発 ———

(1、2 節) イスラエル人は、エジプトを脱出した時に、新しい国民としての産声をあげたのでした。新しい出発です。「主はエジプトの地でモーセとアロンに言われた。『この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。』」

ユダヤの暦（こよみ）は、今までは秋分に近い 9 月の中旬をお正月としていました。しかし、出エジプト以来、これを記念して、アビブの月、4 月を新年としました。この様に、イスラエル人は暦を、変えて、改めて新紀元としたのです。

(13:4 節)「アビブの月のこの日、あなたがたは出発する。」同様に私たちも、主を信じて救いを受けたその日を、いつまでも記念しましょう。そして、その日を覚えて、感謝して、いつまでも主から受けた「初めの愛」(黙示録 2:4 節) から離れない様に心掛けたいものです。

(12:3～7 節) さて、旧約聖書と新約聖書との関係について学びましょう。旧約聖書のいろいろな儀式は新約聖書の光で照らされて、初めて本当の意味を知ることが出来ます。

——— 神の子羊は、イエス様 ———

(3、5 節)「この月の十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい。」「あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。」

神様は言われました。「イスラエル人は過ぎ越しの祭りを守るために、家ごとに傷のない雄羊を殺しなさい。」この子羊は新約聖書のキリストを指しています。

ヨハネ 1:29 節「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」

第一ペテロ 1:19 節「傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血・・・」

——— 夕刻にほふられた子羊とイエス様の死 ———

(6 節)「あなたがたは・・・夕暮れにそれをほふり・・・」夕暮れの時間帯ですが、日が陰り、涼しくなる午後 3 時頃から、日没ごろまでのことです。その時刻に羊をほふるのです。イエス様もちょうどその時間帯、午後 3 時頃に息を引き取られました。

(マタイ 27:46、50 節)「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』これは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。」「・・・イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。」

——— 子羊の血、イエス様の血によって罪の裁きから救われる ———

(7 節)「その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。」この様に神様は言われました。ここには、血による救いが語られています。

第一ヨハネ 1:7 節「・・・御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」エジプト人もイスラエル人も神様の前には罪人です。しかし、この血を見て。神様の裁きは

通り過ぎて行くのです。

(13 節)「その血は、あなたがたがいる家の上で、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたのところを過ぎ越す。・・・」

第一コリント 5:7 節「・・・私たちの過越の子羊は、すでにほふられたのです。」

すでに、救い主イエス様は、私たちの罪のために死んでくださいました。ですから、イエス様を信じ受け入れるならば、神様は、私たちの中に、そのイエス様の血を見て、私たちの罪を赦してくださいます。その時、神様からの裁きは私たちを通り過ぎて行くのです。

——— 肉を食べた ———

(8～20 節) イスラエル人は、子羊の血を門口の、2 本の柱とかもいとに塗るだけでなく、その夜のうちに、その子羊の肉を火で焼いて食べました。このことの意味は、私たちが外に向かってイエス様を告白するだけでなく、イエス様を受け入れることによって、主は私の内に住んでくださいます。そして、主と共に歩み、主の品性に似たものとなるのです。

(ヨハネ 6:53 節)「イエスは彼らに言われた『まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。』」何だか気持ちの悪い表現ですね。でも、これはまさに今、教会で行われている聖餐式です。

——— 種なしパンを食べた ———

(8 節)「そして、その夜、その肉を食べる。それを火で焼いて、種なしパンと苦菜を添えて食べなければならぬ。」イスラエル人は、その夜、種を入れないパンに苦菜を添えて食べました。「種なしパン」とは、不純な動機に惑わされない純真な心を意味します。更に、今急いでエジプトから離れなければなりません。パン種を入れる時間はありません。また パン種の入ったパン（異教的な文化、汚れた思想、人間的な考え方）は腐りやすいのです。注意しなければなりません。ですからイエス様は言われました。

(ルカ 12:1 節)「『パリサイ人のパン種、すなわち偽善者には気をつけなさい。・・・』」イエス様は、罪から救われた者は、もう聖いのですから、その聖さを守って、砕かれた心で生きて欲しいと願っておられます。

——— 苦菜を添えて食べた ———

「苦菜を添えて・・・」とは、「苦菜」はエジプトでの苦難のことです。その苦難を忘れないで、今の恵みをかみしめつつ、生きて欲しいと主は願っておられます。そのためには、常に砕かれ、悔い改めの心を持ち続けなければなりません。

(詩篇 51:17 節)「神へのいけにえは、砕かれた霊。打たれ、砕かれた心。神よあなたはそれを蔑(さげす)まれません。」私たち、自分がどこから救われたか、忘れてはなりません。

——— 家族の救い ———

(3 節) 前後しますが「家ごとに羊を用意しなさい。」このみ言葉から教えられるのは、イスラエルでの、大切な基本的な祝福は家庭から始まるということです。祝福された家庭生活が民族の、そして未来の国の繁栄をもたらすのです。この時、イスラエル人は、家族が全員

集まって、この祭りを守りました。同様に、キリストの救いは家族全員を目標にしています。

今、家族のすべてがそして、イスラエルの民全員が出エジプトをしなければならないのです。イスラエルの民だからと言って油断してはなりません。

子羊の血が塗られていない家の長子は、殺されてしまいます。ですから、その様な油断が起こらない様に、「主が寝ずの番をされた」のでした。

——— 寝ずの番をされた神様 ———

(40～42 節)「イスラエルの子らがエジプトに滞在していた期間は、四百三十年であった。四百三十年が終わった、ちょうどその日に、主の全軍団がエジプトの地を出た。それは、彼らをエジプトの地から導き出すために、主が寝ずの番をされた夜であった。」

今、私たち主に、感謝しましょう。イエス様の死に心から感謝しましょう。

今、自分が救われた日を確認しましょう。

イスラエルの民が、過ぎ越しの夜、子羊の血によって救われ、エジプトから救われ、新しい歴史を迎えて、約束の地に旅立って行ったように、

私たちも、イエス様の血によって、罪の滅びから救われ、新しい生まれ変わりの人生をいただきました。ですから

いつも、この記念すべき日を、覚えてこれからも進んで行きたいのです！

——— 血痕のついた扉 ———

最後に、一つのお話をします。昔、残酷な血なまぐさい戦いがあった頃の出来事です。

敵の指揮官が、その率いる部隊を前にして、ある町の住民を一人残さず殺そうと誓いをたてました。ほどなく、残忍きわまる多くの兵士が、その無防備の町にやって来ました。

たまたま一人の逃亡者が、少し前にこの一団がある家に乱入して、その家の人々を刀で殺すのを見ていました。ところが一人の兵士が、その家を引き上げる時に、血の池に布を浸し、それを入口の扉に叩きつけました。それは、後から来る兵士たちに、その家の中でどんなことがすでに起こったかを知らせるためだったのです。

この逃亡者は走り続けて、町の中央にある大きな家にたどり着きました。そこには、すでに彼の友人たちが大勢隠れていました。そこで彼は今見てきたことを話しました。直ちになすべき事が決定されました。一匹のヤギが庭にいたので、彼らはそれを殺し、その血を扉の上にまき散らしました。扉を閉めるや否や、敵の兵士が町になだれ込んで来ました。

しかし、家の前に来た時に、向きを変えて通り過ぎて行きました。その家の血の付いた扉を見て、もうすでにすべてが終わっていると思ったからでした。

この様にして、周りの多くの者たちは殺されたのですが、その血の扉の中にいた人たちは救われたのでした。

12 章 13 節「わたしはその血を見て、あなた方のところを過ぎ越す。」